

はじめに

野々市は、大野^{おおの}荘^{しょう}湊^{みなと}（金沢市^{かなざわ}金石^{かねいし}）と白山本宮^{はくさんほんぐう}（白山市鶴来^{しらやまおおみち}）を結ぶ白山^{えちぜん}大道^{えちぜん}と、越前^{えちぜん}国と越^{えちぜん}中国^{えちぜん}を往来する北陸^{ほくろくどう}道^{どう}が交差する交通の要衝地で、鎌倉時代後期には、市^{いち}が存在していました。

地元武士団である富樫^{とがし}氏は、1335年（建武^{けんむ}2）より加賀国の守護となり、市の近くに館を構え、そこを守護所にして国内を統治しました。また、守護所や市の周りには、いくつもの集落が営まれていました。

近年、守護所富樫館跡の周辺地や、市内各地で発見された集落遺跡の発掘調査が多く実施され、中世の野々市の様子が徐々に明らかになってきました。

今回の文化財特別展は、富樫氏が守護になって以降の室町時代を中心とした遺跡と、出土品などから当時のくらしについて紹介します。